

奈良・平城宮跡（第二一七次）

奈良・平城宮跡（第二一八次）

1 所在地	奈良市佐紀町・法華寺町・北新町
2 調査期間	一九六五年（昭40）七月～一九六六年（昭41）一月
3 発掘機関	奈良国立文化財研究所
4 調査担当者	樋本亀次郎
5 遺跡の種類	宮殿・官衙跡
6 遺跡の年代	奈良時代～平安初期
7 遺跡及び木簡出土の概要	

この調査は、平城宮の中心部北半にあたる第一次内裏推定地区の東南部分で行つた。検出した主要な遺構は、内裏東辺をかぎると思われる南北方向の築地である。木簡が出土したのは、土壙SK三七三〇で、発掘地区的東南部、南北築地から東へ約二五mの地点でみつかった。方二・二m、深さ〇・七mで、計四点の木簡が出土した。

1 所在地	奈良市佐紀町・法華寺町・北新町
2 調査期間	一九六五年（昭40）九月～一九六六年（昭41）三月
3 発掘機関	奈良国立文化財研究所
4 調査担当者	樋本亀次郎
5 遺跡の種類	宮殿・官衙跡
6 遺跡の年代	奈良時代～平安初期
7 遺跡及び木簡出土の概要	

この調査は、平城宮第一次内裏推定地区の西に接する地点で行つた。佐紀池の南にあたり、小字「池尻」にあたる。検出した遺構は溝・土壙のほか堀三条である。木簡は南北溝SD三八二五から計七九点出土した。その他、伴出遺物としては木製百万塔未製品、漆塗柄頭などがある。

(1) 「▽角俣▽」	210×30×4 031
8 木簡の釈文・内容	
9 関係文献	

- 奈良國立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報四』一九六七年（鬼頭清明）
- 169 木簡の釈文・内容
- 170 紀年銘をもつものとしては「養老七年」「天平十八年」などがあるが、木簡の主体は貢進物付札とその断片である。越前、参河、讃岐、阿波などの貢進付札が出土している。そのうち注目すべきものは、参河国播豆郡析嶋からの贊の貢進付札である。同類の参河国析嶋ないし篠島からの贊貢進付札は、SD三八二五以外でも、第二次

1977年以前出土の木簡 四

- (1) 「参河国播豆郡折嶋海部供奉〔去
カ〕天平十八年十一月」
=料御贊佐米臍六斤
285×21×4 031
- (2) 「参河国〔播豆
カ〕○○○」
(120)×24×4 039
- (3) ×魚十一斤十兩
〔養老七年九月〕
(205)×10×4 039
- (4) 「越前国〔○○郡〕」
- (5) 「讚岐国〔田
カ〕山〔○〕×」
(56)×20×4 039
- (6) •「左衛士府」
•「□相替國」
•「□相替國」
(72)×14×4 081

内裏北方のSKハ一〇、東北方のSD一七〇〇から出土しているが、この参河国播豆郡篠島ないし折嶋からの贊の貢進は、贊の貢進付札のなかでも、月単位であること、海部が貢進していることによつて注目されるが、出土地点をみても、第二次内裏、第一次内裏推定地区付近に限定されており、天皇の供御としての贊の性格をもつともよくあらわしたものと云ふことがである。

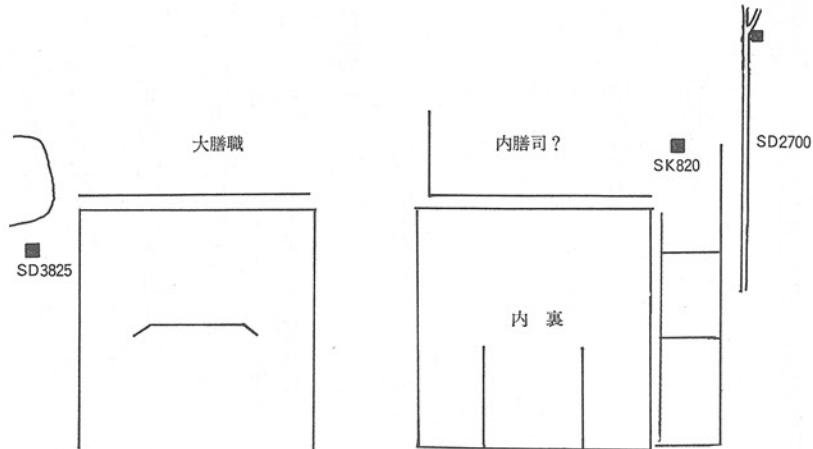
8 木簡の釈文・内容

9 関係文献

奈良國立
化財研究所

『平城宮発掘調査出土木簡概報四』

一九六七年
(鬼頭清明)



平城宮参河国篠島・折嶋木簡出土地点図